

～気候変動を意識したコンパクトで丈夫な稲づくり～ 早めの中干し開始で優良茎・適正生育量確保！

1. 田植え後30日をめやすに中干しを開始する(目標茎数の70%を確保した時)

田植え後25日頃には茎数を確認し、目標茎数の70%を確保したら直ちに中干しを開始する。



めやす：50株/坪植コシヒカリの場合、茎数16本/株

図1 中干し開始時の水田



図2 中干し終了時の水田

中干し効果を高めるために溝切りを実施しましょう！



2. 中干し終了後は飽水管理で根の健全化を図る

ア 中干しは遅くとも出穂期1か月前までには終了する。

イ 中干し直後は、浅水の間断かん水を実施し、徐々に飽水管理に移行する。

ウ 出穂期25日後までは飽水管理を徹底する。

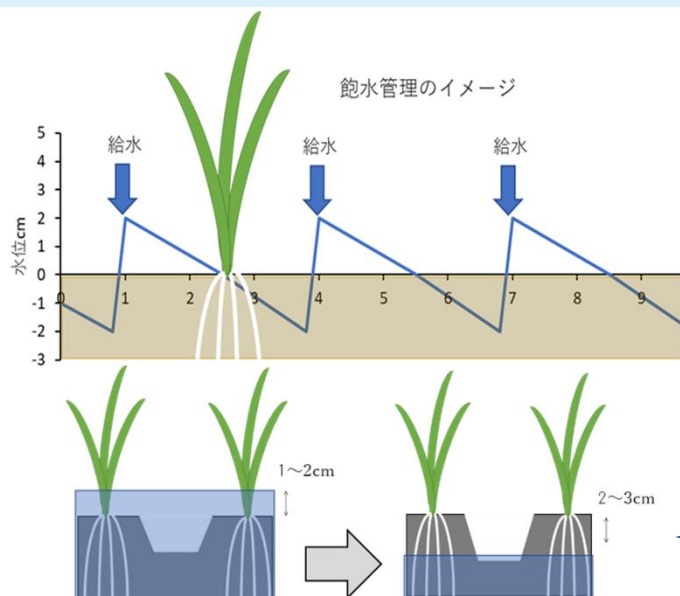


図3 飽水管理のイメージ

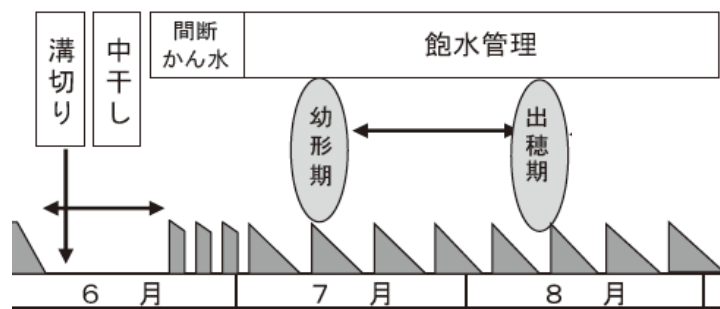


図4 水管理のイメージ

飽水管理のめやす
 足跡や溝などに水が無くなる前にかん水する

3. いもち病の適正防除と斑点米カメムシ類対策を実施する

ア 補植苗はいもち病の発生源となるため、早急に取り除く。

イ カメムシの密度を低く抑えるため、雑草種子が結実しない間隔(3~4週間)で定期的に畦畔や農道の草刈りを徹底する。

ここがポイント！！

- 1 適期に中干しを開始する
(田植え後 30 日頃、目標穂数の 70%の莖数を確保した時点)
- 2 中干し終了後は飽水管理で根の健全化を図る
- 3 いもち病の適正防除と斑点米カメムシ類対策を実施する

1 良質莖の早期確保にむけた水管理

- (1) 活着後は 2～3 cm の浅水管理により、分けつの発生を促す。
用水を更新する場合は、早朝にかん水し、日中は止水として水温の上昇を図る。
- (2) ワキの発生が多い場合は、用水の入れ替えや夜間落水等を行う。
地温の上昇に伴い、ワキの発生が多くなる。用水の入れ替え等により、土壌へ酸素を供給し、根の健全化を図る(表 1)。
- (3) 表層剥離やアオミドロの発生が多い場合は、用水の入れ替えと夜間落水を行う。
改善されない場合は、薬剤散布も検討する。

表 1 ワキの発生程度とその対策

ワキの程度	ワキの発生程度	水稻生育への影響	対策
中	水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い。	根活力低下	用水の入れ替えと夜間落水を行う。
多	水田に足を踏み込むと盛んに気泡が発生する。	根伸長不良	用水の入れ替えと夜間落水を繰り返し行う。
甚	晴天時自然に気泡を発生し、音が聞こえる。また水田を歩くと激しく気泡を発生する。	根伸長阻害 地上部黄化	用水の入れ替えと夜間落水を繰り返ししながら、間断かん水へ移行し、早めに中干しに移行する。

2 中干し・溝切りの適期実施

- (1) 中干し・溝切りの効果
 - ア 無効莖の発生抑制による適正生育量の確保
 - イ 下位節間の伸長抑制による倒伏軽減
 - ウ 土壌への酸素供給による根の健全化
 - エ 収穫時の機械作業を容易にする地耐力の確保
 - オ 溝切りにより、フェーン等緊急時の迅速なかん水や、長雨時の停滞水の排水が可能
- (2) 中干し開始のめやす
 - ア **田植え後 25 日には莖数を確認**し、遅れずに中干しを開始する。
 - イ 田植え後 30 日頃、**目標穂数の 70%の莖数を確保したら直ちに開始**する。
 - ウ 中干し開始時期が早いほど、倒伏程度は軽減し、乳心白粒の発生が抑制される。
(図 1)

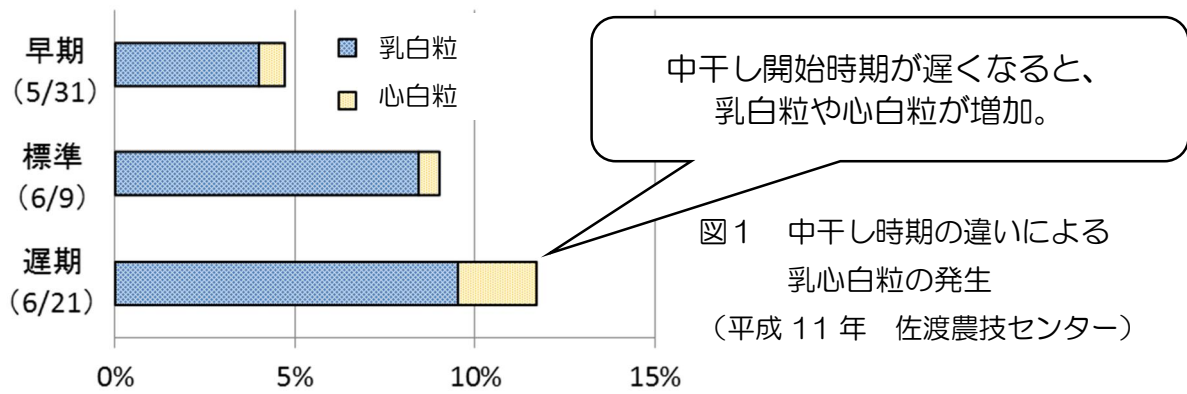


図1 中干し時期の違いによる乳心白粒の発生
(平成11年 佐渡農技センター)

表2 中干し開始のめやす及び中干し程度

品種	目標穂数 (本/m ²)	中干し開始めやす		中干しの程度	
		茎数 (本/m ²)	茎数 (本/株)		
			50 株植		60 株植
コシヒカリ	350	245	16	14	小ヒビが入る程度
こしいぶき	400	280	18	15	
新之助	400	280	18	15	

(3) 溝切りの実施

- ア 中干しの効果を高めるため、溝切りは必ず実施する。
- イ 溝は間隔 2.5m 程度、深さ 10cm 以上とし、末端は必ず水口・水尻に繋げる。

3 中干し終了後の栽培管理

(1) 水管理

- ア **中干しは、遅くとも出穂期 1 か月前までには終了する。(図 2)**
- イ 中干し直後は発根促進、根の健全化及び地耐力の向上のため、浅水の間断かん水^{※1}を実施し、徐々に飽水管理に移行する。
- ウ 出穂期 25 日後までは、**飽水管理^{※2}を徹底することで、根の健全化を図る。**

※1 間断かん水：湛水状態と落水状態を数日間隔で繰り返す。

※2 飽水管理：水尻は止水し、自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡の底に水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する。

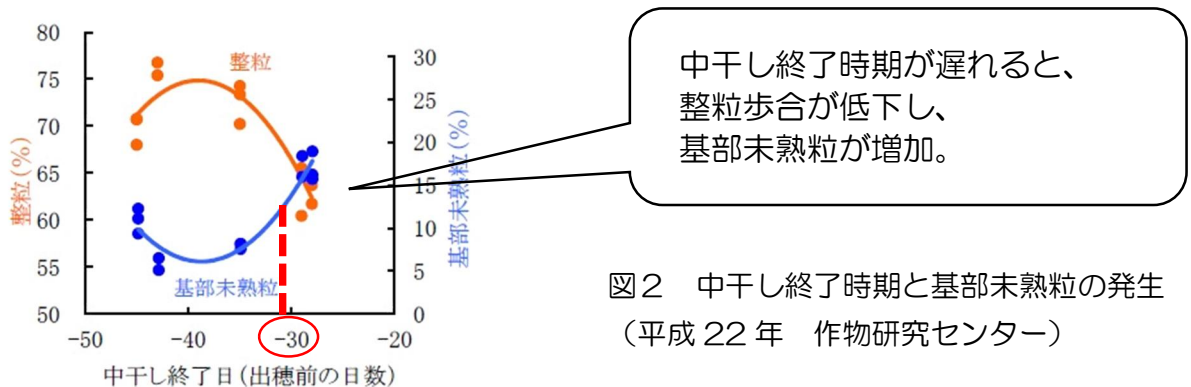


図2 中干し終了時期と基部未熟粒の発生
(平成22年 作物研究センター)

(2) ケイ酸追肥

基肥にケイ酸を施用していない場合、
出穂 40 日前～ 1 回目穂肥の時期に施用する。
(資材で 20～40kg/10a 程度) (図 3)

出穂 40 日前から 1 回目穂肥時までのケイ酸
の施用によって、品質向上が期待できる。
高温年はケイ酸の追肥によって、品質低下が
軽減される。

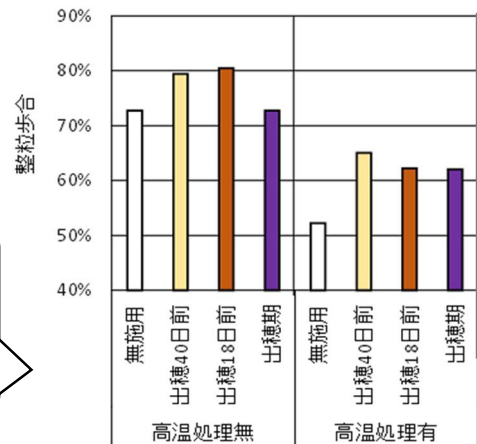


図3 ケイ酸追肥時期別の整粒歩合 (平成 26、27 年 作物研究センター)

4 病虫害防除

(1) 葉いもち防除

- ア 補植苗は、いもち病の発生源となるため、早急に取り除く。
- イ 「新之助」や「わたぼうし」など、いもち病に弱い品種で、予防薬剤を育苗箱施用していない場合は、6月第2半旬(6月10日頃)までに予防粒剤を水面施用する。

(2) 斑点米カメムシ類対策

- ア カメムシの密度を低く抑えるため、雑草種子が結実しない間隔(3～4週間)で定期的に畦畔や農道の草刈りを徹底する。
- イ ヒエやホタルイはカメムシの産卵場所となることから、水田内にヒエやホタルイがある場合は、中・後期除草剤散布等による雑草防除を行う。
- ウ 除草剤の種類によって、散布後の気象条件により薬害が発生する可能性があるため、使用にあたってはラベルに記載されている使用基準や使用上の注意事項等を必ず確認する。

5 「新之助」栽培のポイント

- (1) 異品種混入防止のため、「新之助」作付け1年目のほ場では、除草剤等による異品種混入防止対策を実施する。
- (2) 茎数が増えやすい品種のため、中干し・溝切りが遅れないようにする。
- (3) 葉いもち防除を徹底する。